

キール大学の英語研修を引率して

高 杉 玲 子

1. キール大学の英語研修とは

キール大学の夏季英語研修は、今年で7年目を迎えます。キールという地名は牛の丘という意味ですが、イギリス中部の緑なす広大な田園地帯に、現在イギリスの大学のなかで一番の広さ(600エーカー、東松山キャンパスの8倍)を有するキール大学のキャンパスがあります。戦後創設された大学であるキール大学は、複数の学位を授与する道を開いた学際的の大学として有名です。従って、英語研修も、単に現地で英語の運用能力を高めるというだけでなく、文化をキーワードとして、英国文化を学び考えるというプロジェクトを授業に取り入れたものとなっています。その根底に、異なった文化を持つ人々がどのようにしたら実り豊かなコミュニケーションを築いていけるかという姿勢が貫かれています。その意味で、最初のイギリス文化入門講義に、現在キールの博士課程に在学中で「国際関係」を専門とする日本人の留学生の山中さんによる講義をもってきたのは、有意義でした。彼女は、アンケート調査の結果から、一般のイギリス人は、日本人について歪んだイメージを抱いているというより、まったく、知らないというほうがあっていると述べ、中国人、韓国人、日本人を十把一からげにアジア人としてステレオタイプ化してイメージしているのが現状であると分析し、この大きな障害をい

かにして乗り越えていくかが課題であると締めくくりました。研修期間中にオックスフォード、チェスター、リバプール、ノッティンガムなどに行くのも観光を楽しむだけでなく、授業でも取り上げ、イギリス文化としてその層の厚さを学ぶことでもあります。学生は、6日間の大学寮、12日間のホームステイも経験しました。全体として、3週間のプロジェクトとなっています。

今年の学生参加者は、22名で、男子4名、女子18名でした。学部学科でみると、英語学科が13名、英米文学科が3名、政治学科2名、あと法律、国際文化、環境創造、日本文学科がそれぞれ1名でした。

2. 雨と携帯電話

今夏のイギリスの気候は、雨が多く、メールでキール大学関係者から心配する声が届いていましたが、まさに嵐の到着となりました。ロンドンのヒースロー空港からマンチェスター空港までの乗り継ぎ便が嵐のため欠航になってしまったのです。電光掲示板には、グラスゴー、エディンバラなどの北の便に軒並み欠航や遅延の表示が出ていました。それでも、何便かは飛んでいることが確認されました。わたしたちは、1時間後の次の便に座席を確保しました。空港は待ち人でごったがえしていました。椅子席がいっぱいで、電光掲示板の近くの地べたに座り込んで、出発ゲートが示されるのを待ちましたが、出発時間になっても、一向に埒が明きません。案内に聞きにいくと、「もうすぐですよ。ゲートはすぐそばですから大丈夫」と軽くいなされました。誰かが「野宿かな」という頃に、ゲートが開き、満席のジャンボ機でマンチェスターに向かいました。飛行時間は1時間ですが、かなり揺れて、出された食事をとることができない学生もいました。

イギリス到着直後から携帯電話がフル回転となりました。研修直前にセキュリティの問題が真剣に審議され、引率者には国際携帯電話が必要と申請されました。そのため成田空港で、大学が手配していたレンタルの携帯電話を渡されていたのです。あらかじめ、電話番号を知らされていたので、メールでキールの関係者にも伝えていましたし、関係者の携帯の電話番号もチェックしていました。予定の時間に到着できない事情を伝え、出迎えのバスにも支障がないよう手配を頼みました。しかし、これは、ドイツ回線をもとにしていたため、相手がこの電話に電話をかけてくるには、高いコストがかかります。そのため、キールに到着すると、2、3日して、キール大学からも訪問者用の新しい携帯電話を渡されました。学生たちにも、番号を伝え、困ったときには連絡をもらえるようにしたことは、言うまでもありません。

マンチェスターで、バスに無事乗り込んだときは、本当にほっとしました。例年、マンチェスターの空港まで出迎えていた大学の担当者が、今年はお出向けないということで、大学寮まで自力で行かなくてはなりません。車窓から眺める景色に感嘆の声をあげていた学生たちは、あっというまに全員眠ってしまいました。大学寮では、アコモデーション担当のエリザベスが待っていました。長い一日が暮れ、エリザベスの車に送られて自分のホテルに着いたのは、10時をまわっていました。

翌日は、昼のバーベキュー歓迎パーティで始まる予定でしたが、雨で屋内パーティとなりました。その後、夏期講座企画担当のロビンの案内で広いキャンパスのウォーキング・ツアーにでかけました。その頃には、幸運にも、雨があがっていたのです。エリザベスは生粋のイギリス人でしたが、ロビンはアメリカ人で、家族で京都に6年暮らしたこともある人で、彼女の英語は、日本人に聞き取りやすく、しかもユーモアある話振りで大人気でした。

第2日目から、本格的な授業が始まりました。私はどんな授業風景が展開するのか興味があったので、できるだけ参観するようにしていました。まず、ペーパーテストによって22名を2演習クラスにわけました。先生は、ジェフとグレイスでした。ジェフも、日本で何年も暮らしたことのある人で、連れ合いが日本人、ふたりのこどもは日本で生まれたということで、帰国して1年目でした。日本文学もよく読んでいて、翻訳も手掛けているということでした。グレイスは、ウエールズ出身のベテランの英語教師で、「この授業は、大東の学生にとってどうか、易しすぎないだろうか」とわたしに話しかけてきました。グレイスとは、歓迎パーティで知り合いになり、わたしの持っていたビアトリクス・ポター特集号の『英米文学論叢』を進呈すると大喜びだったのです。

3. 医療センター

2週目から、引率していった学生に大きな問題が起きました。参加者の一人が右親指の先を化膿させたのです。キール大学には医療センターがあり、学内電話をかけて、予約をとって診察を受けるというシステムでした。最初は、抗生物質の飲み薬をもらってそれを飲んでいましたが、どんどん悪化していくので、一日おいた水曜日には、再度受診、今度は別の先生で、切開の必要ありということで、大学病院まで行くように言われました。電話をしてくださって、大学病院の救急センターに紹介状を書いてくださいました。すぐ、タクシーを呼んでもらって大学病院まで直行しました。炎症が関節まで達していたら、専門医による手術が必要と脅かされていたので、救急センターで、麻酔して簡単に切開をやってもらえたときは、付き添ったわたしもほっと胸をなでおろしました。次の日は、大学の医療センターで消毒と包帯交換をしてもらいま

したが、町の薬局に行って、包帯交換セットを買って自分で取り替えるように指示されました。炎症をおこした学生のホストマザーは、小学校の先生で、とても助けになったようです。

もうひとつは、動物アレルギーの問題でした。ホームステイ先の家で、8匹のモルモットを飼っている家庭がありました。昼間は外の芝生に放し飼い、夜は取り込んで、1階と2階のケージにそれぞれ4匹ずつ入れて休ませていました。涙ぐんでいる学生がいるので、聞いてみると、動物アレルギーで夜咳が苦しく眠れないということでした。ホストマザーも気を遣って、家中に掃除機をかけ、モルモットの管理をしてくれましたが、あまり、効果があがりませんでした。学生たちは事前調査で、動物が好きか、何かアレルギーはないか申告することになっていました。そこに「動物は好きで、特にアレルギーはない」と書かれていて、大学関係者からはこちらの落ち度はないと言われ、最終的には、ひとりで、大学寮に戻るしか道がないということになりました。私の提案は、健康センターで医者にもてもらいアレルギーの薬を処方してもらうことと、一晩大学寮を経験してどうするか考えるというものでした。そして、それを実行してわかったことは、プライベートに大学寮を確保するには、一泊4000円かかるということでした。本人の出した結論は、ホームステイ先に戻るということでした。彼女が、こうした経験をとおして、強くなっていくのを見るのは、嬉しいことでした。アレルギーもそれほど悪化することなく、折り合いをみつけているようでした。

4. 清水の舞台

そうこうしているうちに、最後のお別れパーティの日になりました。学生たちは、キールの思い出を綴った雑誌を完成させ、文化プロジェク

トの発表ということになりました。壁には、図解入りの発表が貼り出されていました。どこからともなく、先生に連れられて、サマースクールの学生たちが大勢訪れ、中国人、フランス人などの学生たちにそれぞれのプロジェクトの説明をします。面白いことに、投票箱が設けられ、もっとも魅力的なもの、もっとも有益なものをそれぞれ投票してもらうのです。そして、最後のパーティで、その結果が公表され、賞品を渡たされるという手順になっていました。本当によく考えられていると感心しました。「イギリスのファッション」と「住居」が、その榮譽に輝きました。

お別れパーティは、ホストファミリーを招待し、大学関係者が一同に会し、まず、修了証書授与式から始まりました。人文社会学部長、クルック教授から各自に証書が渡されます。ジェフとグレイスには、わたしが花束を用意し、小さいカードに学生一人一人の名前を書いてもらい、ちょうど、浴衣を着て出席していた学生に贈呈してもらいました。学生たちは、先輩から知恵を授けられていたのでしょうか。日本から色紙を用意してきていて、いつのまにか、そこに、ぎっしりと、お礼の言葉が書かれていました。先生たちはとても喜んでいました。日本での生活の長いジェフは、色紙のことを知っていましたが、グレイスは、初めてで、とても興味をもって、わたしに、裏に漢字で「色紙」と書いてほしいと言いました。

フィナーレで、わたしはひとつの計画を温めていました。何か日本の文化をアピールして、両国の友好関係を深めたいと思ったのです。大東文化大学の学位授与式でも歌うあの「蛍の光」に目をつけました。この曲は、もともとスコットランド民謡なのです。原曲“Auld Lang Syne”（オールドラングサイン：過ぎ去りしなつかしき日々々の意）の歌詞を書いたのは、ロバート・バーンズというスコットランドの有名な詩人で

す。1788年に発表したと言われています。日本に紹介され、稲垣千穎（いながき・ちかい）によって原詞とは違う歌詞がつけられて、誕生したのが、「蛍の光」なのです。「文読む月日」の「文」に「踏み」を掛けたり、「いつしか年も杉の戸を」の「杉」に「過ぎ」を掛けたり、「開けてぞ今朝は」の「開け」に「明け」を掛けたりしています。言葉遊びの天才、シェイクスピアの国ならばこうした掛詞の妙味を伝えたかったのですが、それは断念しました。日本の歌詞を英訳し、卒業式などで歌われることを説明し、日本語で歌いました。イギリスでは、この曲は大晦日に、懐かしい昔の仲間との再会を祝して、杯を酌み交わそうと歌われるということです。

5. 魔の時間

事前説明会が3回おこなわれ、国際交流センターの宮澤さんが、何度も注意していたにもかかわらず、帰りのロンドンまでの大型バスにキール大の国際交流センター部長のアネットが乗り込んできて、キールは安全だけれど、ロンドンはこわいから、十分に注意をするように促したにもかかわらず、思わぬ形で盗難事件が発生しました。キール大を出発して帰国の途につくまでに、ロンドンでの丸2日にわたる自由時間が設定されていました。それに伴い、ロンドンに向かう途中、ロンドン近郊のウインザー城で、日本人のガイドさんが待っていました。この最後の行程は、ガリバー旅行社に依頼されていました。皆は、緊張感がなくなり、開放感にあふれていました。そのため、待ち合わせの時間にバスに戻ってきた際、ついつい日本での習慣がでてしまったのでしょう。むき出しの財布を抱えてトイレに行った学生がいました。そのそばには、売店があったのです。トイレから出て、手を洗っているとき、財布を置き忘れ

ていることに気がついて引き返してみると、もう、財布がなくなっていたのです。その間、数分のことでした。キールでは、学生が携帯電話を置き忘れていても、取得物としてしかるべきところに届けられていて、手元に戻ってくるほど安全でした。それに比し、何というこわさでしょう。幸い、パスポート、クレジットカードは入っておらず、現金だけでしたが、ロンドンで買い物しようとしていた大金がすっかりなくなってしまったのでした。日本人のガイドさんは手慣れたもので、警察への届けなど、いっしょに付き合ってくれました。

6. 英国航空スト

わたしは、その頃、心配事を抱えていました。帰国便が、うまく飛ぶかという問題です。わたしたちが利用した英国航空はイギリスの世界に誇る航空会社のはずですが、色々問題を抱えていました。8月30日の出国日は、ちょうど、イギリスの夏最後の連休にかかっていた。そのため、飛行場の地上勤務員は、そこにストを計画したのです。2週間前には、労使の交渉が妥結してスト回避の見通しとなりましたが、それにもかかわらず、23日に50便、24日に30便と欠航便がでたのでした。欠航便には、国内線だけでなく、国際線も入っていました。代表的新聞「タイムズ」紙の辛口の報道によれば、合理化による人員削減が災いして、夏のバカンス・シーズンに対応した地上勤務員が十分確保できなかったということでした。新しくリクルートした人は、不慣れで作業が遅いので、チェックインに手間取ったとも言います。旅行会社の人は大丈夫と言っていましたが、このような状況のなかで、とても不安でした。

飛行場には、用心深く、3時間前には到着するようになっていました

が、予想に反して、たいした混雑もなく、スムーズに流れて、拍子抜けするほどでした。出発時間が1時間遅れるということはありませんでしたが、心配していただけに、怒りより、この程度の遅れなら我慢と、むしろ、安堵感に満たされたのでした。場内には、各種の免税店があり、最後の買い物やら、あるいは退屈しのぎに、店を次々とまわることもできて、長い待ち時間もそれほど苦にならなかったことも幸いしたと言えましょう。

7. おわりに

いままで、10回以上、イギリスに行き、3年前には、ケンブリッジで1年間の研修生活をするという経験も経ていたのですが、引率するということは、正直、責任が重く、大変でした。しかし、自分自身も楽しまなくては面白くないと思っていたので、色々楽しみをみつけました。学生たちも、出会う人々に、とても積極的に立ち向かっていました。若さにあふれ、元気いっぱいでした。学生たちは、別れ際に、わたしにも、寄せ書きしたカードを贈呈してくれました。8月9日から31日までの3週間、若者から力をもらって、長いようでいて短い旅となりました。

最後に、キール大学の英語研修を支えてくださったすべての人に感謝の意を表したいと思います。特に、国際交流センターのアネット、エリザベス、ロビンにはお世話になりました。今後、この企画がますます発展していくことを願っています。

(本稿は国際交流センター発行の『夏季語学研修報告書』に掲載されたものを、転載したものです。)